

まえがき

イアン・ステイヴンソン

これまでにも、たくさんの人たちが生まれ変わりについて書いています。その人たちのほとんどが、生まれ変わりを肯定していますし、中には、生まれ変わるまでの過程を詳しく説明していると呼ぶ人もいます。また、生まれ変わりとこの考えかたを、こっけいだとして退ける人たちも一部にいます。それに対して、生まれ変わりを裏づける、あるいはその反証となる「証拠」という問題に関心を持つ人はほとんどいません。

ジム・タッカーは、これまでのものとは違う種類の本を書きました。ジム・タッカーにとっては、証拠こそが重要なものになっているのです。ジム・タッカーは、その証拠は生まれ変わりを信じることができる裏づけになるのか、あるいは生まれ変わりを信じざるをえないほど有力なものなのか、と問いかけます。

生まれ変わりに対する異論は、簡単に考えつきません。実際に過去世を記憶していると主張する人たちが少ないという問題、記憶が不十分だという問題、人口爆発という問題（二二九ページ参照）、心と体の関係という問題（心あるいは脳と肉体はどのように関係しているのかという、デカルトの昔か

ら西洋哲学で問われてきた問題」、不正行為という問題などです。ジム・タッカーは、そうした問題をひとつひとつ詳しく検討します。その意味で本書には、類書というものがありません。この種の本は、これまでに一冊もないからです。

私は、読者を道案内してゆくジム・タッカーの手際よさに、特に強い印象を受けました。生まれ変わりという考えかたに対する反論を、ひとつひとついねいに取りあげて検討しながら、それに従って読者に自分で考えるように求めるといふか、考えざるをえなくさせているのです。本書を何げなく読んでいる読者を魅了し、自分たちはもう何もしなくてよいと思わせるほど巧みな書きかたをしています。「死後にはどうなるのか」という、私たちが自問する中で最も重要な疑問に対して、「証拠」こそが——読者の方々が期待するよりも早く——答えを出してくれるかもしれないことを、本書を読んで知っていただきたいと思います。